五歳児の文字への興味と個人差

村石京子

○課題の中で考える

この課題は私自身にとって、いつも興味ある課題として持続している。幼児が文字に興味をもち、文字をおぼえていく過程を現実点にあわせて個々の子どもで知ることができたらといつも思っている。ちょうど幼稚園の二年間あるいは三年間は、大部分の子どもは文字生活に入る扉を開く時期にあたっているので、子どもが文字に興味をもつ時期とかその動機づけや、さらに文字を習得していく方法などを適確に知りたいといつも考えている。またさらに文字を習得してから、彼はそれをどのように自分の生活の中にとり入れているか、その活用度とか必要性などについても調べてみたいなどと考えている。こうした私自身のもっている幼児の文字生活に関する興味と、現実の幼稚園の生活の中での文字のとり扱い、という点を中心にしながら書いていってみたいと思う。

○幼稚園においての文字とのふれあい

日頃、幼児の文字生活に関して興味をもちながらも、現実にはこの問題は幼稚園側では手をつけずにおり、親の手にゆだねてしまっているので、いつの間にやら子どもたちは文字を知り、文字をおぼえているというのが実状ではないだろうか。「幼稚園では文字を扱わないことになっている」「幼稚園では文字を教えてはいけないそうだ」こういったかくれみののかげにかくれてしまって、幼稚園の生活の中では教師と子どもたちは文字によるふれあ

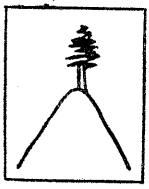
いを表面に出すことを一種のタブーとしてしまう傾向があるのではないだろうか。最近、これとは違ったいき方をし、はっきりと幼稚園の生活の中で文字をとり扱っている幼稚園が出て来ていることを、話で聞いたり、テレビで見たりしたことがある。それにはそれなりのはっきりとした考え方に立ってのいき方であろうが、それにも私には疑問な点が多い。こうした心の中の葛藤をもちながら、五歳児の級を担任し、五歳児の文字指導をどのように行なったら最も適切であろうかと悩んでいるうちに、今年も一年が過ぎてしまった。

五歳児の級を担任して感じることは、この一年間に文字への興味や関心が非常に高まる時期だということである。もちろん、他の面の心身の成長発達も著しいことは当然であるけれど——。個人差も大きいけれど、ごく一般的にいえば、五歳児の一年間で文字生活への手がかりがひらけてくるといえるであろう。四歳児までは、まだ文字は名前などを弁別するための記号的な役割としてあるように見えている。

私どもの園の子どもたちは、在園中から文字を知っている子どもが多いように見られるが、実際には五歳児の級になっても自分の名前はまだ書けないという子どもが級の中に一人二人はたいていいる。知能テストの中に、文章を読むこととか書くことなどがあるが、四歳児の級ではほんのわずかの子どもしかできていない。五歳児になると読みの方はずっとのびているが、書く方はパーセントにしてみればやはりわずかの子どもしかできていない。

四歳児の場合も一字一字の文字は知っており、ひろい読みは多少できるけれど、それが一つのまとまった文章となると読みこなす力はまだ低いようである。短い文章であっても「は」の使い方などはむずかしいし、単語でもなかなか意味をぴたっとつかめない場合も多い。つまり一つ一つの字は読めても、全体把握ができなかったり、有意味にしたりすることが四歳児ではまだ不得手なのだ。しかし、自分の名前であるとか、自分と関係のあるもの、たとえば仲のよい友だちの名前などに関しては、きちっと読むこともできる。黒板に欠席の子どもの名前を書くと、「○○ちゃん、きょうお休みだね」と友だち同士でそれを見ながら話していることなどもある。また、「きんようび」と黒板に書いておくと、き、ん、よ、う、びと一字ずつ読んでみて、しばらくして「きょうきんようびだって」と、自分の読んだ字と理解とが重なると、うれしそうに報告したりしているのを見うけることもある。

図1



鈴木ビネーテストに文章の書きとりの問

題がある。「やまのうえにおおきなきがあります」と書きなさいと問題が出されると、まだ文字を書くことを知らない子どもは、苦心さんたんして自分の可能な解決の方法を見つけることがある。「これでいい？」と被検者である彼がちょっとはずかしそうに見せてくれる用紙には図1のように画かれている。私がはじめてこの経験をしたときは、いささかあっけにとられたこともあったが、近頃はできませんと手をつけないでいる子どもよりも、問題解決の仕方が自己流ではあるけれど、とにかくのりきろうという子どもらしいがんばりにほほえましく思ったりすることもある。もちろんテストではマイナスであることは当然であるけれど……。そして幼児にとっては、むずかしい長い文章で書くよりも山の絵と大きな木の絵をかいた方が率直であるのだなと思ってしまう。おとなの私たちにとっては、文字とはとても便利で役に立つものであるけれど、まだ幼児にとっては一字一字つづるということはずいぶん面倒な手順であるように見うける。しかし幼児も、文字が相手にものごとを伝える大事なものだということは知っている。この段階で、私はときどき古代エジプトの象形文字と、今、目の前にいる幼児の文字感覚に何か共通なものがあるような感じがしてくることがよくある。

ずっと以前に五歳児の級で読字力調査ということを行なってみたことがある。四十六文字を無作為に並べておいて、級の個々の子どもに一字一字読ませてみた。

調査年月	読める子	読めない子
25年5月	68%	3%
29年5月	80%	2%
32年3月	95%	0
34年1月	97%	0

この場合四十四字以上読めた子を〈読める子〉とし、二字までしか読めない子を〈読めない子〉として扱った。

三十二年、三十四年の卒園期も近い時期の調査では、五歳児の級のほとんど全員があいうえお――んの四十六文字なら読みとれることが調査にはあらわれている。このような読字力調査を、五歳児の級において一学期の初めと卒園の時期と二回行なってみると、五歳児の一年間にどの位子どもが正確に文字をつかみとるかがわかってくるのではないだろうか。

こうした調査を継続的にやってみたいと考える一方、幼稚園の教師としてはそれにふみきれないためらいもある。それは早い時期にこうした調査を行なうと、こちらは単に調査としての意味しかもたなくとも、教育熱心な親の気持というものは、ともすると思いがけない方向に進んでしまったりするからである。

文字に関しては個人差が大きいだけに、なかなか子ども自身が

興味を持つ時期まで、親は待っていられない場合もあるようだ。普段から級の中で文字を読んだり書いたりする子どもに対して、何となく羨望を感じるような親があれば、園側としてそれにいささか拍車をかけるような調査を行なうことは軽々しくできないなやみがある。

よくお母さんたちから「うちの子はまだ字に興味をもちませんが○○ちゃんはもう一人で絵本なんかどんどん読んでますね」とか、「もうそろそろ字を教えた方がよいでしょうか」などと問われることがある。私はたいてい「なるべくいっしょに絵本を読んでごらんなさい」とか、「もうじき興味が出るでしょうから、それまで待ってごらんなさい」という。けれどそれまで辛抱強く待ってくれる親は数少ないようであるけれど、たまに「二〜三日前から急に字をおぼえたがりまして……」というお母さんの顔はとてもいきいきとして嬉しそうだったりする。

もちろん、子どもが字をおぼえたがるまで教えないといっても、それは文字の刺激を全く与えないでほうっておくのではなく、絵本などによる環境設定は十分に試みてほしいものである。

○絵本のとりあつかい
——教師もともに絵本をみよう——

私の持論では、子どもが絵本に興味をもったときは、文字への手がかりをもったときとなっている。幼いときから、家庭環境の中に絵本が十分に用意され、あそびの中で絵本をみることをくりかえしている子どもは、文字の刺激がおのずと早くから与えられ、文字を習得することが比較的早くなっている。

幼稚園でも、もちろん、三歳児、四歳児の級からこの環境づくりは十分行なっておくことが大切である。

かざりもののようにきちんと整った本棚は、子どもが親しめないから、気やすく絵本をひっぱり出してみることができる絵本のコーナーを保育室の中に用意し、いつでも見たいときに見るように習慣づけができるようにしたい。絵本のコーナーの活用を教師も子どもともに行なって、教師もともに絵本を見る機会をもつことが子どもへの大きなよい刺激である。

三歳児、四歳児の頃は絵本に興味をもった子どもたちと数人で楽しく絵本を見る機会をつくればよいが、五歳児になると、これにもう一歩積極性をもたせたい。保育内容の中での絵本の扱いということにいっそう注意をはらいたいものである。今まで紙芝居やお話をしてあげていた場面にも絵本をとり扱ってみよう。紙芝居などに比べると、絵本の絵は小さくて大勢の場合には見えにくいと懸念することもあるけれど、五歳児の級では童話の楽しさが

十分わかるから熱心にきいている。読みおわったあと、本棚に立てておいたり、机の上においておいたりするとすぐ見つけて「さっきの絵本！」といいながら何人かで見ているおりがよくある。よく文字の読める子どもが教師の口調をまねして読んで、まわりの友だちがきいていたりする場面もあったりする。こうした刺激を教師がどんどんつくっていくより、子どもたちの絵本への興味も著しく伸びていく。

絵本の保育の場におけるとり扱いは詳しく述べる頁がここにはないけれど、童話絵本ばかりでなく、観察絵本なども保育室の中にはもちろんあってほしいものである。そして絵本なら何でもよいというわけではなく、街には絵本が氾濫しているけれど、その中から良いものをえらぶということが教師に課せられた大きな課題である。

五歳児の中でも文字をおぼえたばかりの子どももあれば、もうずいぶんすらすらと読む子どももあるので、絵本の内容にも幅が必要である。「子どもがはじめて手にする本」というお話を石井桃子さんからうかがったことがある。そのときはチビクロサンボの原本を例にあげられたが、絵と文が全く一致しているようにありたいといわれた。一頁目には「あるところにチビクロサンボという男の子がいました」と書いてあり、一人の男の子の絵が書いてあるだけ、次の頁はチョッキのこと、次はズボンのこと、靴のこと、次々と新しい頁がめくられて、そこに新しい物語が展開するという。そこにつづられてある文と絵が全く同じであることがどんなに子どもたちに喜ばれているかを語られ、この条件から子どもに読ませたい本をあげておられた。日本の絵本は絵にも文章にもかざりが多すぎるものが概して多いともいわれていた。確かに、色彩が強すぎたり、文章の説明が長すぎたりするものも多い。しかし最近は子どもに読ませたいよい絵本もずいぶんふえているようでうれしい思いをすることがある。それに何といってもこういう絵本のよいことは、子どもが自分自身で読んでいけるような短い文章でつづられており、しかも絵をみていろいろなことをくみとることができ、そのため何回も何回も見なおしたいような味があるということである。絵本と知識とを結びつける人も多いかもしれないが、私は情操陶冶の面の価値を大きく認めたい。そのためにこそ、豊かな感受性を育むことのできるような幼年文学ともいえるような、味わい深い絵本を彼らに手わたし、時にはともに読み、時には自立して読ませるようにすすみたいと思っている。

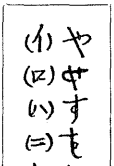
五歳児の日常生活の中では絵本をとり扱うことが多いだけに、つい紙面を費してしまったが、子どもが絵本を読みたいという気

持をもったとき、子どもの文字力はそれにともなってぐんと伸びることは確かである。

○文字を有意味でとらえさせる

子どもが文字についてまだあまり興味の進んでいない段階でまわりから教えられた場合はどうであろうか。その場合には、文字はまだその子にとっては意味や価値を見出せず、無意味なものに見えているであろう。無意味であれば、子どもはなかなか覚えたいという意欲もおこさない。だから「うちの子どもは文字に興味をもちませんが――」となってしまうのではないだろうか。

一字一字独立した字としてでなく、自分の名前など有意味のつづりの方に子どもは興味をもつ。自分の名前――→家の人の名前と、だんだんにわくをひろげていったら、自然に文字の範囲もひろがっていくのではないだろうか。この場合も書くこととあわせて教えようとする人も多いけれど、読みと書くこととは別々に扱った方がよいのではないだろうか。なぜなら読むことは、形の識別であるから比較的簡単にできるけれども、書くことは子どもにとって手の細かい協応動作は不得手であるからうまくいかない。「あ」とか「ね」「れ」「ん」等はその傾向が強いように見られる。それに子どもにとっては文字はおぼえはじめは符号であるから、書く場合も、上図の(イ)でも(ロ)でもどちらでもかまわない。(ハ)でも(ニ)でもよいし、(ホ)でも(ヘ)でもいっこうにかまわない。だから必然的に鏡文字が多くなってしまう。それをあまり早い時期から「こっちむきですよ」とお母さんからくり返されたら、うんざりしてしまうであろう。ここに「文字ぎらい」という現象ができてくるのではないだろうか。



子どもがおぼえたい意欲のおきたときに、文字を教えると、その習得にかける時間もきわめて前の場合に比べて短時間の間に、自分のものにしてしまうことができる。

レディネスができたときがよいという例を一つあげてみよう。五歳児の級で、Aという男の子が知能も高くあそびのよいリーダーであった。彼は五歳の級の二学期まで文字に興味がなかった。他の面が順調に伸びていれば文字は学校で教わるときでよい、と家庭でもそのままにしていたそうである。そのAが、ある日友だちBといっしょに電車でかなり遠くまで行く機会があり、そのとき電車の窓から外を眺めていた。これから出かけるところに胸をはずませているうちに、窓から駅名を見てBは「次は○○」と駅につくごとに読みだした。Aにはそれが読めないのでだまっていたそうだが、家に帰るなり「Bちゃんが駅の名前が読めるのに僕

にはわからなかった。僕にも字を教えて」と母親にせがんだそうである。そして本当にすばらしい速度でひらがな四十六文字を自分のものとしてしまい、それをくみ合わせて使ってあるもの、もちろん駅名もふくめて、読みとれるようになったそうである。

○文字教育はあせらずに個々の子どもの興味にあわせて

五歳児の文字生活を見たときに、そこには大きなひらきがあってとまどってしまうこともしばしばある。だからといって文字生活の低い段階の子どもを引きあげるということにも疑問がある。それは現在の時点においては個人差があまりにも大きく、たしかに四歳児あるいは三歳児のときにすでに文字をおぼえたものと、五歳になってもまだ文字に興味のない子どもとでは差があるのは当然であるけれど、もっと長い将来をも含めて考えたときには、この差がいつまでも続くものではなく、どこかで追いつき、あるいは逆になる場合も出てくると考えることもできるからである。それに早い時期に文字力を習得することが、子どもの将来にとってよいという根拠のあるものでもない。だから幼稚園では、そして家庭でも、文字にふれる機会をつくり、刺激を与えることは必要だけれども、あえてそれ以上に子どもたちに無理に教えこんだり、つめこんだりすることは、教師や親の自己満足のためであって、かえって文字ぎらいの子どもを生み出したりはしないだろうか。やはり、幼稚園では、現在のようにそれは全く個人個人さまざまであって扱い方の疑問も残るけれど、一般的にいえることは興味が出るまでそっとしておきたいという気持が強い。

知りあいの男の子が年長組のお正月過ぎ、もうすぐ就学という頃まで文字にあまり興味がなかった。もちろんお母さんは、やっきになり教えたがるけれど、彼はおもちゃを分解したり男の子らしいいたずらを考えたりする方がずっと幸せという顔をしている。彼のお父さんはこういっておられた。「この子は小学校に入った当初は苦労するでしょうけど、男の子だからそれもいいと思っています。今は彼のやりたいことをとにかく十分やらせて、充実した幼児期であることの方が大切です。一年や二年、国語の時間に苦労したって、それが一生続くわけではないし、まさかおとなになっても新聞や本の読めない人間にはなりませんよ」と、たんたんと話しておられた。文字教育にあくせくする人が世の中に多いだけに、この人の言葉はとても私には印象深く残っている。豊かな人間性を培うのに役立つ道具として生かされてこそ、文字は大きな意味がある。ただ一文字を知ることが、文字教育ではないということをくり返して、結びとしたい。

（お茶の水附属幼稚園）